

標高605mの関伽井嶽は、古くから修験者の修業の場、地区民1286年前の734年(天平6)、源観上人が薬師如来像を安置して、多くの人々が行き交い、祈り、さまざまな言い伝えが生まれた。

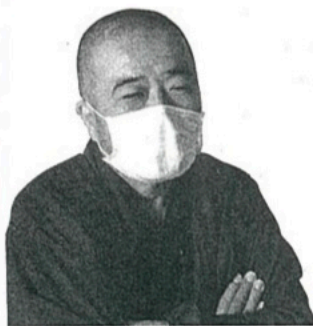
特集 龍燈伝説と関伽井嶽

龍燈は、燕石からできないと見ることができなかつたそうですね。夜光虫だとか、ガス、いわゆる人魂みたいなものが水の上を通っているのでは、と言われていたのですが、わかりません。もしかしたら、いまでもあるのかもしれない。気象条件とか、さまざまなものが変わってしまい、人の目には見えていないのかな、とも思います。タイミングが良ければひょっとして、とも思うのですが、木が大きくなってしまっていることも、見えない要因になっているのでしょうか。

関伽井嶽は、霊場と言われているだけに、スーッとした気配のようなものを感じることはありません。それは目に見えるわけではなく、感覚的なものです。たぶん、みなさんも感じることができる

関伽井嶽 常福寺住職 上野 宅正さんのはなし

地域のランドマークとして 役割を担って行く必要が



十四年後に千三百年を迎えます。それだけ存在しているということは、地域との接し方や役割などを、時代に合わせて変えてきた、ということだと思えます。いろいろの意味で、いまが変わる時期なのかな、と考えています。

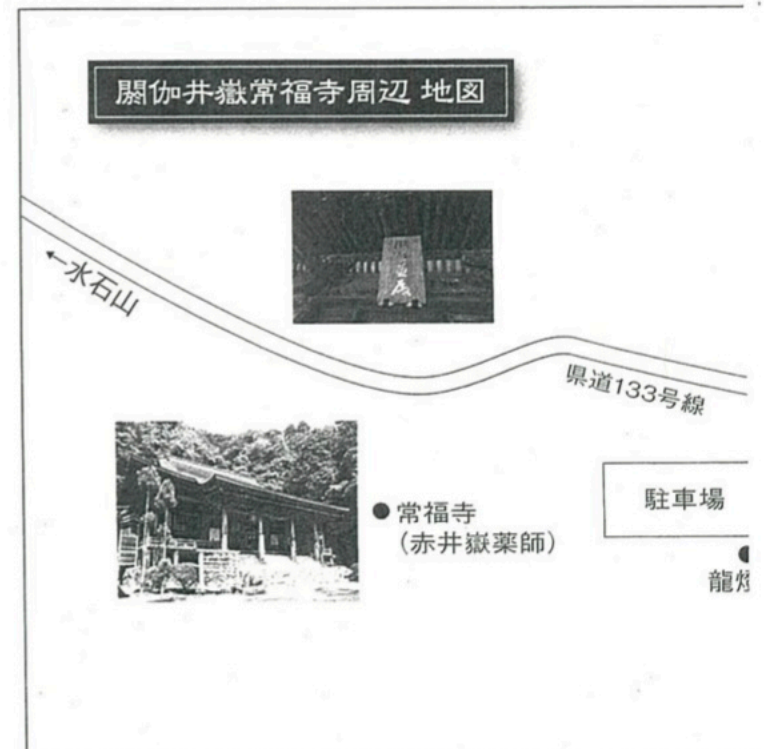
人口減少で檀家さんが減り、寺の存続が大変になってきます。大問題ではあるのだけれども、それが当たり前の時代もありました。駐車場に車を置いてドアを開けた瞬間に感じる、空気感のようなものです。参拝者のなかには、そういう話をされる方が、結構います。

夜も、真っ暗でシンとしているのに寂しくないんです。それは気味の悪いものではなくて、にぎやかな感じなんです。人の霊とか仏教的なものというよりは、自然のいろいろなものが集まってきた感じなんです。

と思うのですけれども、駐車場に車を置いてドアを開けた瞬間に感じる、空気感のようなものです。参拝者のなかには、そういう話をされる方が、結構います。

観光とは「光を観る」と書きます。それは地域の光であり風景で、恒久的な歴史が軸にないのだめだと思っています。新しく創り出すものではなく、長い時間をかけて育まれたものであるべきです。それにさまざまなものが付随され、スクラップアンドビルドが繰り返されていきます。そうではないと長続きはしません。

関伽井嶽は、ブナの南限で、ヒノキの自生の北限です。境内から少し降りると、ヒノキ林、裏はブナ林で、風景がまったく違います。よく植物の新種が発見されていて、環境省の人たちが2mの高低差で輪切りに調査をしています。



龍燈現象が世に知られるようになったのは、江戸中期の地理学者、長久保赤水が文字に残したことが大きい。赤水は常陸国多賀郡赤浜村(現在の高萩市)出身で、一八〇一年(享和元)に八十三歳で亡くなっている。

上野宅正住職は「木々が生長したため、かつての風景が見られない状態になっている。木を伐採したり、龍燈杉の周辺を整備する方法を考えたい」と話す。

上野宅正住職によると、龍燈が盛んに見られていたころは、かなり納税をしていたという記録が残っていて、いかに観光収入があったかを証明している。